

大学院リサイタルシリーズ⑤

～秋風に音をのせて～

2020年 10月 10日(土) 11:00 開演(10:30 開場)

洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン 1F

1. 相田 実久(ピアノ)

F.リスト／《巡礼の年 第2年 イタリア》S.161 R.10 より

1. 婚礼

3. サルヴァートル・ローザのカンツォネッタ

F.リスト／バラード 第2番 短調

2. 島津 翠(マリンバ)

パイアス・チェン／練習曲 短調

トマシュ・ゴリンスキー／ピュリティ

3. 森合 爽子(ピアノ)

F.リスト／《巡礼の年 第2年 イタリア》S.161 R.10 より

5. ペトラルカのソネット第104番

F.ショパン／バラード第3番 変イ長調 Op.47

バラード第4番 短調 Op.52

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

■ 曲目解説

F.リスト(1811-1886)／《巡礼の年 第2年 イタリア》S.161 R.10 より

1. 婚礼 3.サルヴァートル・ローザのカンツォネッタ

バラード 第2番 ロ短調

《巡礼の年 第2年 イタリア》は、1837年7月から39年11月にかけて作曲された。マリー・ダグー伯爵夫人とフランツ・リストがふたりで滞在したイタリアの地で触れた、絵画や文学など数々の芸術から受けた印象を音楽としてしたためたものである。《婚礼》はルネサンスの三大巨匠の一人、画家ラファエロによる、聖母マリアと聖ヨゼフの婚礼の場面を描いた『マリアの婚礼』にインスピレーションを受けて作曲された作品である。明るく清澄な響きを特徴とする。

《サルヴァートル・ローザのカンツォネッタ》のタイトルにあるサルヴァートル・ローザは17世紀のイタリアの画家、彫刻家、詩人である。カンツォネッタとは16世紀後半に流行した軽い気分の小歌曲のことであり、非常に明るい曲となっている。カンツォネッタの詞がピアノ楽譜の中にも書き込まれている。「私のいる場所は変わるが、情熱は変わらない」という内容であるが、リストが載せた詩は実はボンチーニによるもの。この歌詞の旋律は曲中様々な声部に現れる。リストはピアノ独奏のバラードを2曲書いているが《バラード第2番 ロ短調》はギリシャ神話から靈感を得て、作曲されたと考えられている。アプロディーテー(愛と美と性を司るギリシャ神話の女神)の女神官ヘーローと海峡の対岸に住むレアンドロスが恋に落ち、レアンドロスが海を渡りヘーローに会いに行く。これは夏の間続いたが、ある冬の夜レアンドロスは波に巻き込まれ、溺死した。ヘーローは彼が亡くなったのを目の当たりし、自ら命を絶った。この曲は、この神話のように男性的な旋律と女性的な旋律が明確に表現されている。大きく息の長い男性的な旋律と優美で可憐な女性的な旋律が対照的に現れ、半音階やオクターヴなどの様々な技巧に混じって、幻想的で激しく劇的に広がっていく。(相田 実久)

パイアス・チェン(1982-)／練習曲 ホ短調

トマシュ・ゴリンスキー(1986-)／ピュリティ

パイアス・チェンは1982年中華人民共和国の香港出身で「若い中国系カナダ人」と称され、オレゴン大学の打楽器科准教授として教えている。《練習曲 ホ短調》は彼がバッハについて教わった師であるエドワード・アルドウェルへ捧げた曲である。自身の作品に自信の無い彼に対し「他の人があなたの音楽をどのように判断するかを恐れるな。心に浮かぶものは何でも書け」と教わった時に出来た曲であり、とてもシンプルだが彼の最も素直な作品の1つである。この曲は1つの物悲しげな旋律が何回も形を変えたり、見え隠れしたりして1つの曲になっている。

2曲目の"Purity"は日本語訳にすると「純度」等の意味合いのタイトルである。この曲は7つのセクションがあり、様々な調性へ転調されリズムカルな部分や柔らかなトレモロの部分で構成されている。タイトル通り色合いや濃度、調性を用いて構成された表情豊かな曲である。この曲を作曲したトマシュ・ゴリンスキーはポーランド出身でグダンスク音楽アカデミー、アントワープ王立音楽院卒業し、今では自身が卒業したアントワープ王立音楽院で教えている。(島津 翠)

F.リスト(1811-1886)／《巡礼の年 第2年 イタリア》S.161 R.10 より

5.ペトラルカのソネット第104番

〈ペトラルカのソネット〉はイタリアで活躍した大詩人、ペトラルカ(1304-74)の代表作『抒情詩集』よりソネットを3篇選んでその内容を音楽で表したものの。第104番は恋に落ちた喜びと苦しみの二面を歌っている。

F.ショパン(1810-1849)／バラード第3番 変イ長調 Op.47

バラード第4番 ヘ短調 Op.52

ショパンはバラードをという名を器楽に使った最初の作曲家であり、1843年までの間に4曲を作曲した。本来バラードとは文学上の物語詩、またはそれに音楽をつけた歌曲などを指した。語源的にはラテン語のballare(踊る)に由来する。ロベルト・シューマン(1810-1856)の証言によると、ポーランドを代表するロマン派詩人アダム・ミツキェヴィチ(1798-1855)の詩にインスピレーションを受けて作曲したという。しかし詩を読んだときに受けた主観的感情を曲の中に吐露したものであって具体的に物語を音楽で描写する標題音楽ではない。全4曲はすべて6拍子で描かれており、その6拍子から引き出された特性が、バラード本来の重要な要素である〈舞踏〉を存分に活用している。また、主題が2つありそれらに変容し、絡み合い、劇的な急展開がありクライマックスが築かれて終わる。

バラード第3番は1840～1841年にかけて作曲された。この頃のショパンの幸せな気持ちを反映してか、全体的に和やか雰囲気にも包まれる。この曲はミツキェヴィチの「水の精」から着想されているとも言われている。

バラード第4番は1842～1843年にかけて作曲された。恩師ジヴヌィと親友マトゥシンスキと死がショパンの内面に影を落としているのか、全曲を通して悲劇的なトーンが濃厚である。この曲はミツキェヴィチの「ブドゥリスの三兄弟」が念頭にあったと言われている。(森合 爽子)

■Profile

相田 実久(ピアノ)

栃木県出身。宇都宮短期大学附属高等学校卒業。2歳よりヤマハ音楽教室にて学ぶ。第9回栃木県ジュニアピアノコンクール奨励賞。第17回全日本アールンピアノコンペティション部門F級奨励賞。これまでにピアノを中山育代、梶木良子、松浦健、鳥羽瀬宗一郎の各氏に師事。フィンガートレーニングを恩田明香、室内楽を羽川真介、安永徹、市野あゆみの各氏に師事。洗足学園音楽大学を経て現在、洗足学園音楽大学大学院修士課程2年次在学中。

島津 翠(マリンバ)

東京都出身。洗足学園音楽大学打楽器コースを卒業。11歳より打楽器を始める。これまでに小川佳津子、幸西秀彦、薄田真樹、清水太、野本洋介、古川玄一郎、の各氏に師事。現在、洗足学園音楽大学大学院修士課程2年次在学中。

森合 爽子(ピアノ)

神奈川県出身。東京女学館高等学校卒業。洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。在学中にアンサンブル・スタディクラスで歌曲伴奏を学ぶ。第13回フレッシュ横浜音楽コンクール大学生S部門の銀賞、連弾S部門の銀賞を受賞。これまでにピアノを平松薫、室内楽を清水将仁の各氏に師事。現在ピアノを内田ゆみ子、歌田紀子、歌曲伴奏を森島英子の各氏に師事。現在、洗足学園音楽大学大学院修士課程2年次在学中。